

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：30126

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K19572

研究課題名（和文）家族システムを活用したうつ病を有する医療系大学学生の修学支援策の考案

研究課題名（英文）Development of study support programs for medical college students with depression that enable them to continue their studies from the viewpoint of the family system

研究代表者

原田 由香（Harada, Yuka）

札幌保健医療大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：00464694

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、うつ病を有する医療系大学学生を対象とした修学支援を家族システムの観点から考案することを目的に、実際にうつ病を有しながら大学を卒業することのできた卒業生6名にインタビュー調査を実施した。その結果、家族以外に大学や医療、友人からのサポートによってうつ病を有する医療系大学大学生のもつレジリエンスが引き出され、卒業することができていた。また大学教職員を対象とした研修会の開催では、うつ病を含む精神的な課題を抱えた学生を対象とした修学支援を検討する上で、支援者支援の必要性について示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、実際にうつ病を有しながらも家族のサポートを得て医療系大学を卒業することのできた卒業生にインタビュー調査を実施した。その結果、修学を継続するためのサポートリソースとして家族システムに留めるのではなく、大学内の教職員や医療との連携に加え、身近な友人からのサポートを含める必要性が示唆された。本研究の成果は、増加傾向にあるうつ病を有する医療系大学学生を対象とした修学支援システムを考案する上で、実体験に基づく貴重な資料となると考える。そのため今後の支援開発に有益な知見を得ることができたことから、学術的にも社会的にも意義のある研究と考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a school support system for medical college students with depression from the viewpoint of the family. We interviewed 6 persons who were able to graduate from college despite depression. The results showed that to devise a study support system for medical students with depression, it is necessary to include support from close friends as well as from college faculty members, student counseling, and medical care, rather than limiting it to cooperation with family members. We believe that the students with depression were able to control their medical conditions and graduate because their resilience was elicited. These findings suggest that it is necessary to devise a learning support system for students. In addition, in workshops for university faculty and staff, it was suggested that aid for supporters is necessary when considering study support for students with mental problems, including depression.

研究分野：精神看護

キーワード：うつ病 修学支援 医療系大学学生 家族システム

## 1. 研究開始当初の背景

日本学生支援機構の高等教育機関における障害のある学生の修学支援に関する実態調査<sup>1)</sup>によると、障害学生の在籍率は増加傾向にあり、その中でも精神障害によって支援を必要とする障害学生は発達障害を含めると2021年には20,926人と障害学生全体の半数以上を占めている。この障害学生たちへの支援として、2016年の障害者差別解消法の施行に伴い、大学では障害のある学生に合理的配慮を行うことを義務もしくは推奨されるようになり、支援の標準化が進みつつある。

しかし精神障害の場合は疾患の特性上「事例ごとに話し合いを重ね決定される」とされており、対応する者に委ねられているのが実情である。その中で実践報告として、親子関係の安定を図ることで間接的に学生を支援することができていたという報告<sup>2)</sup>や、精神障害の中でもうつ病を有する学生は配慮を受けることが逆に頑張りや本人に強いてしまう場合がある<sup>3)</sup>など、うつ病を含む精神障害を有する学生への支援の難しさが窺える。

特に近年増加傾向にある医療系大学の学生は、卒業要件として臨地実習が複数あり、指導を受けながら新たな環境下で慣れない技術を実践しなければならない状況が数か月続く。このような状況は、健康な学生であっても強い緊張感や不安を伴うものであり、ストレス耐性の低い精神障害を有する学生にとって病状悪化のリスクを孕んでいる。そのため実習先への病状説明や配慮の程度など、大学側だけでなく実習施設側も病状への対応に苦慮しているのは明白であり、精神障害のある医療系大学学生を対象とした具体的な支援策の確立が期待されていると考える。

また大学生の生活実態調査(ベネッセ教育総合研究所, 2016)<sup>4)</sup>では、近年の大学生のもつ傾向として、精神面で保護者に頼る傾向が強まっていることが報告されており、学生の生活全般を支える立場である家族を含めた支援を検討する必要がある。

## 2. 研究の目的

家族システムを活用したうつ病を有する医療系大学学生の修学支援策を考案するために以下の研究を行った。

研究1: 医療系大学在学中にうつ病を発症以降、学生は修学を継続するためにどのような体験をし、システムとしての家族からどのような影響を受け、何をサポートと感じたのかについて明らかにし、修学支援に必要な示唆を得ることとした。

研究2: 研究1で得られた知見に基づき、うつ病を有する医療系大学学生の修学支援にかかわる大学教職員向け研修会を開催し、うつ病を有する学生の適切な理解や支援に対する認識等の効果を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### 【研究1】

研究デザインは、まだ十分に解明されていないうつ病を有する医療系大学学生にとっての有効な修学支援策を考案するために、質的記述的研究デザインとした。データの収集方法は、協力者と相談し、プライバシーの守られる公共施設の個室または自宅などで1人につき1回60~90分程度の半構造化面接を実施した。分析方法は人間を対象にある“うごき”を説明する理論を生成する方法と言われており、実践的な活用が可能であるという特徴をもつ木下の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを選択した。インタビュー内容として、うつ病を発病してから医療系大学卒業までにどのような体験をし、システムとしての家族からどのような影響を受け、何をサポートとして感じたのか、家族システムの特徴(全体性、組織性、円環的因果関係など)に基づき、質問項目を作成した。

倫理的配慮として、研究者が所属していた大学倫理委員会の承認を受け(承認番号: 019004-3)実施した。研究協力者は、研究の趣旨について口頭と書面にて説明を受け、自由意思に基づいて同意書に署名した。研究に関してプライバシーと個人情報の保護を厳守した。

### 【研究2】

学内における学術セミナーのひとつとして大学教職員向けに「うつ病を有する医療系大学学生の修学支援」をテーマに研修会を開催した。内容としては、障害学生とその支援の現状とうつ病の病態や特性、研究1で得られた知見について説明し、対応の検討を試みると共に、うつ病を有する学生への適切な理解や支援に対する認識等の効果を明らかにするため、研修会終了後にアンケート調査を実施した。

## 4. 研究成果

### (1) 【研究1】研究協力者の概要 (Table1.)

協力者は医療系大学在学中に精神科または心療内科を受診し、本人もしくはその保護者が医療機関において医師からうつ病と説明を受けた6名であった。年齢は20~30代の女性で、就労状況として5名が正職員、1名がアルバイトとして勤務していた。選定条件として、大学卒業後1年以上経過しており、現在の病状として入院の必要はなく、半年以上病状の悪化がみられてお

らず、家庭内もしくは社会的役割を担うことのできている状態とした。

Table1. 研究協力者の概要

	年齢	性別	就労状況	健康状態	発病時期	在籍期間	罹病期間
A氏	30代	女性	正職員	普通	2年次後期	6年	2年くらい
B氏	30代	女性	正職員	良い	3年次	4年	約2年半
C氏	30代	女性	正職員	良好	4年次	5年	8年
D氏	30代	女性	正職員	普通	2年次	7年	13年
E氏	20代	女性	アルバイト	治療中	1年次	4年半	6年
F氏	20代	女性	正職員	治療中	2年次後期	6年	2年くらい

(2)【研究1】うつ病を有する医療系大学学生が認識した修学を継続するための有用なサポート

うつ病を有する医療系大学学生が認識した修学を継続するために有用なサポートは、7カテゴリ抽出された。以下に生成されたカテゴリを、概念は【】、語られた内容の一部を「」を示す。本研究の協力者は、システムとしての家族から生計を維持するためのサポートを提供する家族として【経済的にサポートしてくれた親】や【家事を代わりにしてくれるきょうだい】から、サポートを受けていた。語りとしては、「ご飯食べないでいたら、“ちょっと何日食べてないのさ、ほら食べるよ”とか、洗濯できないってメソメソしていたら、“そんなの私の洗濯物と一緒にすればいいでしょって、ほれよこしなさい”ってきょうだいが強引にやってくれる。」(D氏)などがあつた。また病状経過に伴い改善した家族関係と左右されない関係が存在し、【聞き役に徹してくれた母親と踏み込みすぎない家族】や、【病状理解が不十分な家族】の存在がありながらも、【悪化することのなかった家族との関係】がうつ病を有する医療系大学学生の支えとなっていた。その他、うつ病を有する医療系大学学生が認識した修学を継続するための有用なサポートは、大学内において【話を聞いてもらった教員や心理士】、学生相談室・保健室の利用など話を聞いてくれる大学関係者から受けていた。また【精神科受診を勧めた教員】や【学生の代わりに筋道をつけてくれる教員】によって精神科の医療に繋がり、医療的サポートが得られる精神科医療機関において【治療のために入院する】ことや、【受診し受けられた薬物療法とカウンセリング】を体験していた。

さらにうつ病を有する医療系大学学生は、【話を受け止め傍にいてくれる友人や恋人】、【ほどよい距離を保ってくれる同級生】など病状に対応しながら普段通りの関係を維持している友人や恋人の存在や、【相談されたうつ症状に悩む学生と一緒に過ごす】などうつ症状を介して支え合う同級生の存在があり、身近な友人らによって日々サポートを受けていた。語りとしては、「私が今でもすごい良かったなと思うのは、ずっと傍にいてくれたっていう、何も言わないし、何も聞かないんですけど、うん、ただいるだけっていう感じで、私が話し始めたら聞き、でも別に学校行かなくても何で来ないのとも言わず、ただ行ったらただ「おはよう」って言うてくれるだけの距離感。」(B氏)などがあつた。

このようにうつ病を有する医療系大学学生は、家族はもちろんのこと、それ以外に大学、医療、友人といった4つのリソースから複数のサポートが得られたことにより、自身のもつレジリエンスが引き出されていた。具体的には、【病状に対する理解のない教員】とは距離を置き、【とりあえず大学へ行くという生活】を送り、病状をコントロールしながら病状理解のない人と距離を置きながら継続した大学生活をしていた。また【前向きな考え方への変化】など、うつ病を契機に変化した考え方ができるようになり、卒業に至っていたと考える。

以上のことから、うつ病を有する医療系大学学生を対象とした修学支援システムを考案する上で学生の生活全般を支える家族はもちろんのこと、大学内の教員・学生相談室と医療の連携に加え、身近な友人からのサポートを含めたシステムとして、修学支援策を考案する必要性が示唆された。

(3)【研究2】大学教職員を対象とした研修会の開催と評価

参加者は31名と後日視聴者6名の計37名であつた。参加者による評価は全員が参考になったと回答しており、うつ病を有する学生の実態や修学支援の内容についての理解が深まったことや、学生とのかかわり方を考える際の参考になったと回答していた。その一方で増加傾向にある精神的な課題を抱えた学生を支援していくためには、サポートする側に心の余裕が必要であるという意見もあつたことから、うつ病を含む精神的な課題を抱えた学生を対象とした修学支援を検討する上で、支援者をサポートするための支援の必要性についても示唆された。

## 今後の課題

初年度フィールドワークとして修学支援の実態把握や示唆を得る目的で、うつ病患者とその家族のサポートグループやクリニックで実施している復職支援グループへの参加を予定していたが、新型コロナウイルスの影響により困難となった。そのためインタビュー調査終了後に、あらゆる対人支援の現場で応用が可能とされているオープンダイアログに関するオンライン視察研修に参加した。この視察研修ではフィンランドでオープンダイアログを実践している病院スタッフやピアサポーターから直接体験談を聞くことができ、実践する上での重要事項や普及することの困難さについて学ぶことができた。したがって今後本研究で明らかとなった修学支援のサポートリソースのひとつである身近な友人からのサポートを含めた修学支援策を具体化させていく上で、オープンダイアログの対話実践は参考にする予定である。

また今後は、うつ病を有する医療系大学学生の修学支援に関与する大学教職員側の観点から調査することにより、修学支援のさらなる標準化に向けた検討ならびに対象疾患を拡大することを予定している。

## 引用文献

- 1) 日本学生支援機構 (JASSO): 令和3年度 (2021年度) 大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査\_プレスリリース: chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\_shogai\_syugaku/\_icsFiles/afieldfile/2022/08/17/2021\_press.pdf
- 2) 前田章, 外ノ池隆史, 糠田敬子他: 心の問題を抱える学生への復学支援 休学者相談週間の試み, CHAMPUS HEALTH 5 1 (2), 127 - 132, 2014.
- 3) 近森聡: 関西大学における障害のある学生の修学支援 精神 / 発達障害の場合, 関西大学人権問題研究室紀要 75, 43 - 64, 2018.
- 4) ベネッセ教育総合研究所: [https://berd.benesse.jp/up\\_images/textarea/04\\_daigakusei\\_sec1\\_P17\\_29.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/textarea/04_daigakusei_sec1_P17_29.pdf)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 原田 由香、澤田 いずみ、吉野 淳一	4. 巻 29
2. 論文標題 うつ病患者の配偶者が認識していたうつ病が家族にもたらした影響とその対処	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本精神保健看護学会誌	6. 最初と最後の頁 40～49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20719/japmhn.19-040	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yuka Harada, Izumi Sawada, Kenichi Ogawa
2. 発表標題 Resources recognized by Japanese nursing college students with depression that enabled them to continue their studies
3. 学会等名 26th East Asian Forum of Nursing Scholars 2023（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------